

オオサンショウウオ保全の現状

文・写真

田口 勇輝（日本オオサンショウウオの会）



写真-1 オオサンショウウオ(1mを超える大型の野生個体)

様々な団体による啓発活動によって、にわかにオオサンショウウオ人気が一般市民に浸透してきているように感じるのは私だけでしょうか。しかしながら、本種を取り巻く生息環境が年々厳しさを増していることは、それほど知られていないように感じます。本稿では、本種の生息環境を整理し、保全の現状について述べたいと思います。

本題に入る前に、簡単にオオサンショウウオについて説明しましょう。本種は西日本の河川上流から中流域に生息する、全長1.5mにもなる世界最大級の両生類です（写真-1）。2300万年間ほとんど姿を変えておらず、生きた化石とも呼ばれ、進化的にも重要な種といえます。寿命は80～100年以上もある長命な動物です。夜行性で、昼間は川岸の横穴や大きな石の下に隠れています。夜になると河床に出て待ち伏せをし、口元にやってきた魚やカニなどの動物を捕食します。国の特別天然記念物に指定されており文化財保護法で守られていますが、国や各地域のレッドリストに掲載され、絶滅が危惧されています。

さて、オオサンショウウオが生

息する河川環境については、かねてから人工化による影響が懸念されてきました。人工化の中身を考えると、まずはコンクリート護岸による悪影響が上げられるでしょう。護岸によって、隠れ場所や産卵場所としている横穴がなくなってしまう繁殖できないことや、そもその生息場所もなくなっています。特に、産卵につかう巣穴は奥から伏流水が出るような特別な条件が揃っている岸辺の横穴を使うことが多く、護岸による影響は甚大です。

次に、利水用の取水堰や治水用の砂防堰堤など河川横断工作物が問題となり、この障壁によって繁殖期前の遡上が妨げられています。私は大阪府立大学大学院で夏原由博先生にご指導をいただき、大学院の修士課程でこのテーマに取り組みました。8月末から9月上旬の繁殖期に先駆けて7～8月に調査をすると、堰の直下で遡上しようとして上れずに溜まっている個体が多く見つかります（写真-2）。また、オオサンショウウオは大雨による増水で下流へ流されてしまうことがありますが、その後は元の場所へ戻ろうとします。その際にも、これらの障壁が邪魔



写真-2 取水堰によって繁殖前期の遡上が阻害されている個体



写真-3 人工巣穴内で産卵

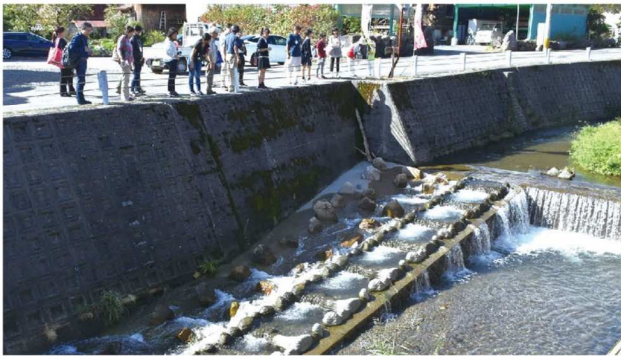


写真-4 魚道と併設されたオオサンショウウオ用の遡上路

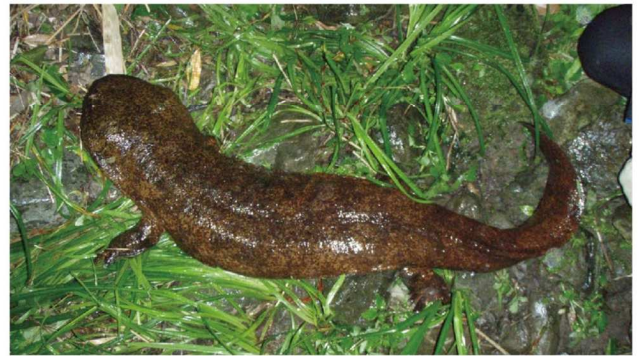


写真-5 チュウゴクオオサンショウウオとの交雑個体(京都市で撮影)

をして遡上できず、近年頻度が増している集中豪雨によって個体が下流へ下流へと流されてしまっていると考えられます。山口県岩国市で実施された保護調査事業では、漁協や市民による聞き取り調査によって、昔はあまり見かけることがなかった中流域において最近では多くの個体が漁具にかかったり、見かけられたりすることが増えているという結果が示されました。今年4月に広島市を流れる太田川の河口域に近い原爆ドーム前で発見されたオオサンショウウオは、全国ニュースとして広く取り上げられ話題となりましたが、おそらくこの個体も、流されて元の生息地へ戻れなくなった一例なのでしょう。

これらの保全対策として、コンクリート護岸に人工巣穴が少しずつ設置されるようになってきました。設置されている人工巣穴の数が増えてくるにつれて、最近では人工巣穴での産卵もしばしば報告されます(写真-3)。し

かし、未だに成功率はかなり低く、増水による土砂流入で巣穴が完全に埋まってしまうことも少なくありません。コンクリート護岸の代替案として人工巣穴は比較的有用ですが、やはり現状では自然の岸辺を保全するほうが重要だと思います。

取水堰等の横断工作物を解消する保全対策として、本種が使える遡上路を設置する例も増えつつあります(写真-4)。魚道は比較的多く見られてきましたが、四肢をつかって河床をあるく「ほぶく匍匐タイプ」の本種は、魚道を使って遡上することができず、スロープ状の遡上路が必要になります。ただし、河川上流部の川幅が狭いところでは、こういった遡上路を設置しやすい面がある一方で、川幅が数十mを超えるような中流域にさしかかってくると横断工作物の規模も大きくなり、遡上路の設置も大変になります。また、上流域の治水のために作られている砂防堰堤は数mを超えるような高い段

差となることが一般的で、このようになところに遡上路を付けることは容易ではありません。

こういった生息環境の悪化に追い打ちをかけるように近年問題となっているのは、チュウゴクオオサンショウウオとの交雑問題です。京都、三重、奈良、岡山に続いて、今年に入って広島でも交雑個体が発見されました(写真-5)。皮肉なことに、奈良では在来のおおさんしょううおのために作られた遡上路を使って、交雑個体が分布を広げているという話もあります。交雑個体は在来種よりも成長が速いと考えられ、そのことが攻撃性にも影響すると示唆されています。

まさに四面楚歌といった日本固有のおおさんしょううおが今後も持続的に生息していくためには、より多くの人が本種の研究や保全に関わり、行政と協働した取組みを少しでも早く、多く進めていくことが求められています。